14.2イ-934
*1200701247492*

蠶絲試驗場資料第二號
昭和十四年五月

# 原蠶種管理法に依る新品種に就て

（昭和十四年）

立憲民政黨政務調査館
叢A 264
14.7.13
14.21 934

始

# 原蠶種管理法に依る新品種に就て（昭和十四年）

## 目次


一、新品種決定の經過竝其の品種名……一
二、原蠶種の性狀と飼育上の注意……三
三、交雜種の性狀と飼育上の注意……一二
甲、春蠶に適する蠶品種……一三
乙、夏秋蠶に適する蠶品種……一三
附
一、蠶品種の主なる性狀調査表……二一
二、飼育竝蠶種製造上の注意事項……二六


14.2イ
934

夏秋蠶品種の飼育時期

| 品種名 | 飼育時期 | 備考 |
|---|---|---|
| 日一一〇支一〇六號 | 初秋期 | |
| 日一一〇支一〇六號 | 初秋期 | |
| 日一一一支一〇七號 | 初秋期 | 晩秋期は蟲質に遜色のあることがある。 |
| 日一一二支一一〇號 | 晩秋期 | 初秋期は絲質に遜色のあることがある。 |
| 日一一三支一〇七號 | 初秋期晩秋期 | |
| 日一一三支一一一號 | 晩秋期 | 初秋期は絲質に遜色のあることがある。 |
| 日一一四支一一〇七號 | 晩秋期 | |
| 日一一五支一一〇八號 | 晩秋期 | |

備考
本表は關東地方に於ける例で、地方に依つて必ずしも一樣に云ひ難いが、蠶品種選擇の參考に示したものである。

I種
W
*1200701247492*

14.2イ
934

夏秋蠶品種の飼育時期

| 品種名 | 飼育時期 | 備考 |
|---|---|---|
| (日一〇號 支一〇六號) | 初秋期 | |
| (支一〇七號) | 晩秋期 | |
| (日一一三號 支一一一號) | 晩秋期 | 初秋期は絲質に遜色のあることがある。 |
| (日一一四號 支一〇七號) | 晩秋期 | |
| (日一一五號 支一〇八號) | 晩秋期 | |

備考
本表は關東地方に於ける例で、地方に依つて必ずしも一樣に云ひ難いが、蠶品種選擇の參考に示したものである。

**正誤**

二四頁(日一一四號 支一〇七號)の化性は「二化(一、二化に近い)」の代りに「二化(一化に近い)」とする。

I種
W
*1200701247492*

# 原蠶種管理法に依る新品種に就て(昭和十四年)

## 目次

一、新品種決定の經過竝其の品種名……一
二、原蠶種の性狀と飼育上の注意……三
三、交雜種の性狀と飼育上の注意……一三
甲、春蠶に適する蠶品種……一三
乙、夏秋蠶に適する蠶品種……一三
附
一、蠶品種の主なる性狀調査表……二一
二、飼育竝蠶種製造上の注意事項……二六

# 原蠶種管理法に依る新品種に就て（昭和十四年）

## 一、新品種決定の經過竝其の品種名

原蠶種管理法の定むる所に依り、原原種の品種及原種の交配形式を附議する爲、昭和十四年一月十二、十三の兩日第三回蠶品種審査會が開催せられた。

本會の議に附せられた蠶品種は、昭和十二年一月農林省告示第十八號に依り、蠶品種の性狀調査を申請したるもの、及國の蠶絲試驗場より優良なりとして既に配付せるものであつて、原種に在りては、主として、蠶絲試驗場本支場に於ける飼育竝繰絲成績を、又交雜種に在りては、主として、（一）蠶絲試驗場本支場に於ける飼育竝繰絲成績、（二）府縣蠶業試驗場に於ける飼育竝繰絲成績、（三）養蠶者委託飼育竝繰絲成績、（四）作柄調査を主としたる養蠶者に於ける飼育成績（特約養蠶者に於ける現地調査）等を基礎として審議し其の議決を見るに至つたものである。即ち夫等の品種名は次の如くである。

（一）政府の製造配付すべき原原種の品種（七品種）

分離白一號（太）　國蠶日一一二號　改中巣　郡是青　榮光　國蠶支一一〇號　改安

（二）蠶種製造者の依るべき原種の交配形式（七形式）

春蠶に適するもの

（國蠶日八號　國蠶支一〇七號）

夏秋蠶に適するもの

（分離白一號（太）　國蠶支一〇六號）　（國蠶日一一二號　國蠶支一一〇號）　（改中巢　改中巢　改安）　（郡是青　國蠶支一〇七號）

（榮光　滿月）



農林大臣は第三回蠶品種審査會の決議に基き、品種名を左記の通り決定し、昭和十四年一月二十五日、農林省告示第三十三號を以て公示した。

（一）原蠶種管理法第三條の規定に依り、政府の新に製造配付すべき原原種の品種（七品種）

日一〇號　日一一二號　日一一三號　日一一四號　日一一五號　支一一〇號　支一一一號

（二）原蠶種管理法第十一條の規定により、蠶種製造者の依るべき原種の交配形式（七形式）

春蠶に適するもの

（日八號　支一〇七號）

夏秋蠶に適するもの

（日一〇號　支一〇六號）　（日一一二號　支一一〇號）　（日一一三號　支一〇七號）　（日一一三號　支一一一號）　（日一一四號　支一〇七號）　（日一一五號　支一〇八號）

既に決定せられ、昭和十三年度より政府の製造配付すべき原原種の品種（一八品種）及蠶種製造者の依るべき原種の交配形式（一二形式内春蠶に適するもの一〇、夏秋蠶に適するもの二）の性狀に就ては、昭和十三年五月、蠶絲試驗場資料第一號に記載したるを以て、茲には今回新に加へられたる蠶品種の性狀を叙說し、蠶品種の選擇、養蠶、製絲等の參考に資することとする。

## 二、原蠶種の性狀と飼育上の注意

原蠶種管理法の定むる所に依り、政府の新に製造配付すべき原原種は七品種である。次に其の各品種に付、系統、來歷、蠶兒、繭、蛾及卵の性狀と蠶種の保護及催青、蠶兒の飼育、上蔟及採種等に關する主なる注意とを記述する。

### 日一〇號

本種は熊本縣蠶業試驗場に於て、從來配付せる分離白一號を纖度太きものに淘汰改良せるものであつて、從前の品種名は分離白一號（太）である。一化性の日歐固定種であつて、支一〇六號と組合せ、夏秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は紫赤色を帶び、眠蠶、起蠶及熟蠶が赤味を增加することは、日九號に似てゐる。

斑紋は形である。

蠶兒の經過は日八號より稍短い。一化性の日歐固定種であるから、氣象、飼料關係等が宜しきを得ない場合、飼育稍困難なることがあるから、日九號と同樣に、春期に飼育するのが安全である。已むを得ず、夏秋蠶期に飼育せんとする場合には、冷涼にして乾燥し、桑葉の良好なる地方を選び、厚飼を避け、特に良桑を飽食せしむることに留意せねばならぬ。

繭は俵形で、縮皺密に、色は白い。日九號に比し、繭重、繭層重、及繭層歩合稍多く、繭絲纖度は稍太い。初發蛾より終發蛾に至る日數稍長く、蛾尿稍多き故、採種上注意を要する。

支一〇六號と組合はす場合、春期催青溫度を日一〇號は攝氏二三度中心、支一〇六號は二五度中心とし、飼育、上蔟、及種繭保護の溫度兩品種相等しきときは、日一〇號の催青を支一〇六號より八、九日早くし、夏秋期、催青、飼育、及種繭保護の溫度等しきときは、六、七日早くすれば良い。

越年卵色は鼠及藤鼠で、一蛾の產卵數は多い。

蠶種の人工孵化法は、卽時鹽酸孵化法を行ふ場合、卵の保護溫度攝氏二五度のときは、產卵後三〇時間目、二七度のときは、二〇時間目に浸酸する。冷藏鹽酸孵化法を行ふ場合、冷藏日數が三〇日以內、特に二〇日以內なるときは、孵化が不良になり易いから注意を要する。

## 日一一二號



本種は國が昭和十三年國蠶日一一二號として配付せる二化性の日歐固定種であつて、支一一〇號と組合せ、主として晩秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色で、斑紋は概ね姫であるが、形を混ずることがある。日一一一號に比して、全齡經過稍短く、蟲質强壯である。冷濕及壯蠶期の高溫と多濕とを避け、厚飼を行はず、新鮮なる良桑を適量に多回給與して、飽食を圖るが良い。

繭は俵形で、縮皺粗く、色は白い。其他の繭質は日一一一號と相似たる點が多い。

支一一〇號と組合はす場合、兩品種の催青、飼育、上蔟及種繭保護の溫濕度が相等しきときは、日一一二號の催青著手を、支一一〇號より、春期は六、七日、夏秋期は五、六日早くすれば良い。

越年卵色は濃藤鼠で、一蛾の產卵數は多い。

催青溫度低き場合、生種を生じ易い傾向があるから、攝氏二六、七度を目標とし、二五度以下に下げぬやう注意するが良い。

蠶種の人工孵化法は、日一一一號に準ずれば良い。

## 日一一三號

本種は長野縣蠶業試驗場が、昭和五年、三重縣蠶業試驗場より讓受け、之に淘汰改良を加へ、之を改中巢と稱してゐたものである。二化性の日本種であつて、支一〇七號又は支一一一號と組合せ、夏秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色で、斑紋は形である。

日一一一號に比し、蠶體重稍少く、經過が稍短い。稚蠶期蠶座の周邊に這出る性質があり、又往々給與桑の下に蟄居し、匍ひ上りが悪いことがあるから、剉桑は稍小形とし、一時に多量給與を避け、少量多回給與に依り、飽食を圖るが良い。又餉食當時、食桑が不活潑であるから、此時期の給桑量に注意して、殘桑を餘り多くせぬことが肝要である。稚蠶期の冷濕、壯蠶期の高溫、多濕を特に避け、厚飼を行はず、除沙分箔の勵行に依り、蠶座の清潔と乾燥とを圖るが安全である。

本種は又催眠時、蠶體に光澤が出てから食慾が盛んとなり、且光澤現はれてより、就眠迄の時間が長い傾向があるから、此時期の給桑に注意して、桑不足なきやうにせねばならぬ。

繭は俵形で、縮皺稍粗く、色は白い。日一一一號に比し、繭重、繭層重及繭層歩合稍少く、繭絲長稍短く、繭絲纖度稍細い。

本種と組合はすべき支一〇七號又は支一一一號の催青より種繭保護に至る溫濕度が本種に等しき場合には、本種の催青著手を、春期、夏秋期共に、支一〇七號又は支一一一號より、一、二日早くすれば良い。

越年卵色は藤鼠で、一蛾の產卵數は多い。

本種は生種を生ずることがあるから、催青並稚蠶飼育溫度を攝氏二五度以下に下げぬやう注意せねばならぬ。

蠶種の人工孵化法は標準溫度、標準比重で、四分三〇秒乃至五分が適當である。



## 日一一一四號

本種は郡是製絲株式會社に於て、育成せるものであつて、從前の品種名は郡是青である。支一〇七號と組合せ、夏秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色であるが、壯蠶期は稍紫赤色を帶びる。斑紋は形であるが、姫を混ずることがある。

日一一一號に比し、蠶體重稍多く、經過は稍短いが、擧動並食桑緩慢で、殊に餉食當時の食桑が不活潑であるから、是等の點に注意し、一時に多量給桑を行はず、少量多回給桑に依るが良い。又軟葉の障害を受け易いから、未熟桑葉を避け、良桑の飽食を圖るが良い。

二化性日本種であるが、一化性としての保護取扱が必要であるから、原蠶飼育は春期に行ふが安全である。已むを得ず、夏秋期に行ふ場合は、特に壯蠶期に於ける高溫と多濕とを避け、薄飼を行ひ、且除沙分箔の勵行に依り、蠶座の清潔と乾燥とを圖ると共に、良桑の給與に努めねばならぬ。

熟蠶は擧動緩慢で、蠶座の周圍に這出ることが少く、低溫の場合、桑葉中に營繭することがある。又上蔟より營繭に至る時間が稍長い傾向があるから、未熟蠶の上蔟を避け、且此時期は低溫と多濕とを防ぐべきであるが、夏秋期に於けるが如き高溫は、蔟中又は繭中斃蠶を多からしめるから、此點注意が必要である。

繭は尖り味ある淺縊俵形で、縮皺稍密に、色は錆色を帶びた白である。日一一一號に比し、繭重、繭層重、繭層歩

合稍多く、繭絲長稍長く、繭絲量稍多く、繭絲繊度稍太い。

蟲體に於ける雌雄性徴の識別稍不明瞭であるから、雌雄鑑別に注意を要する。

上蔟より發蛾に至る期間が稍長く、且發蛾稍不齊で、發蛾後の放尿量が稍多いから、採種上注意を要する。

支一〇七號と組合はす場合、催青、飼育、上蔟及種繭保護の溫濕度、兩品種相等しき場合は、日一一四號の催青を支一〇七號より春期は、七、八日、夏秋期は、六、七日早く始めれば良い。

越年卵色は濃藤鼠で、稀に鼠卵を混じてゐる。一蛾の產卵數は多い。

蠶種の人工孵化法は、日一一一號と大差ないが、浸酸の刺戟に對し敏感であるから、高溫竝長時間に失せる處理を避けるが良い。又冷藏浸酸孵化法の場合、冷藏時期早きに過ぎざるやう注意を要する。

## 日一一五號

本種は片倉製絲紡績株式會社に於て、淘汰改良を加へたものであつて、從前の品種名は榮光である。二化性の日本種であつて、支一〇八號と組合せ、夏秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色に淡紫赤色を帶び、斑紋は形である。

日一一一號に比し、全齡の經過は稍短い。二化性の日本種の中では蟲質は强い方ではないから、夏秋期飼育は春期程容易ではない。稚蠶期の冷濕、壯蠶期の高溫多濕、軟葉の給與、厚飼、一時の多量給桑等を避けるが良い。四、五齡期の經過が比較的長いから、各齡前半期、食桑の不活潑なる時期は、給桑量を控へ目にして、蠶座の冷濕又は蒸熱



に陷ることを防ぐが良い。

眠起稍不齊の傾があるから、眠除網入（糠入）の時期早きに過ぐるときは、眠中多濕に陷る處あるを以て、注意が必要である。

繭は俵形で、縮皺普通、色は白い。日一一一號に比し、繭重、繭層重、繭層歩合多く、繭絲長長く、繭絲量多く、繭絲繊度は大差ない。

支一〇八號と組合はす場合、蠶種の催青より種繭保護に至る溫濕度等しきときは、本種の催青著手を支一〇八號より春期及夏秋期共、二日內外早くすれば良い。

越年卵色は藤鼠で、一蛾の產卵數は多い。

生種を生ずることがあるから、催青竝飼育溫度を攝氏二五度以下に下げぬことが安全である。

蠶種の人工孵化法は、他の二化性日本種と大差ないが、支一〇八號等に比し、浸酸時間を稍長目にするが良い。

## 支一一〇號

本種は國が昭和十三年國蠶支一一〇號として配付せる二化性支那種であつて、日一一二號と組合せ、主として、晩秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色である。稚蠶期より四齡頃迄油蠶性を呈してゐるが、五齡期には普通蠶と殆ど異ならぬやうになる。斑紋は姫である。

支一〇七號に比し、蠶體重稍少く、經過稍短く、食桑活潑で、且發育が齊一で、蟲質は強い。發育が速であるから、厚飼を避け、各齡盛食期前後の取扱に注意し、給桑不足のないやうにせねばならぬ。又稚蠶、壯蠶期の冷濕、壯蠶期の高溫多濕を避けるが良い。

繭は楕圓形で、縮皺普通、色は白い。支一〇七號に比し、繭重、繭層重は稍少ないが、繭層歩合稍多く、繭絲量は稍少ないが、繭絲長稍長く、繭絲纖度は稍細い。

不脫繭蛾稍多きを以て、發蛾前種繭を切開して置くが良い。

不受精卵を生じ易いから、種繭の保護溫度を攝氏二五度中心となし、低溫を避け、且種繭の冷藏又は雌蛾の抑制をせぬことが肝要である。又交尾產卵中低溫の場合は、不產卵蛾又は小數產卵蛾を生ずることがあるから、此時期も攝氏二五度中心に保つが良い。

日一一二號と組合はす場合、前記せるが如く、本種の催青著手を日一一二號に比して、春期は六、七日、夏秋期は五、六日遲くすれば、兩品種の發蛾が揃つて來るから、種繭の冷藏等の無理を避けることが出來る。

越年卵色は綠色を帶びたる藤鼠で、生壁色卵を混じてゐる。一蛾の產卵數は稍少い。

生種を生じ易いから、催青溫度は攝氏二五度以上となし、且其間一日、一六時間以上、明所に置き、稚蠶飼育溫度も亦攝氏二五度以下に下げぬことが肝要である。

蠶種の人工孵化法は、支一〇六號又は支一〇七號に準ずれば良い。

## 支一一一號

本種は長野縣蠶業試驗場が昭和三年以降、二化性支那種を改良して得たる「安」に、更に淘汰を加へたものであつて、從前の品種名は改安である。二化性支那種であつて、日一一三號と組合せ、夏秋蠶用に供せられる。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色で、斑紋は姫である。支一〇七號に比し、蠶兒の經過は大差ない。食桑活潑で、發育が齊一で、蟲質は強い。支一一〇號のやうに發育が速であるから、厚飼を避け、各齡盛食期前後の取扱に注意し、給桑不足のないやうにせねばならぬ。稚蠶期、蠶座の中央に向つて蠶寄りをする性質があるから、給桑前座直しを行つて、蠶兒の厚薄なきやうにすることが必要である。又稚蠶、及壯蠶期の冷濕、壯蠶期の高溫多濕を避けるが良い。

繭は楕圓形にして、縮皺普通、色は白い。支一〇七號に比し、繭重は似てゐるが、繭層重、繭層歩合稍少く、繭絲長稍短く、繭絲量稍少く、繭絲纖度は稍太い。

日一一三號と組合はす場合には、本種の催青著手を日一一三號より、春期及夏秋期共に、一、二日遲くすれば良い。

越年卵色は藤鼠で、濃淡櫻鼠卵を混じてゐる。一蛾の產卵數は多い。

生種を生じ易いから、蠶種の催青溫度は、攝氏二五度以上、一日一六時間以上の明催青を行ひ、且稚蠶飼育溫度を攝氏二五度以下に下げぬことが肝要である。

蠶種の人工孵化法は、支一〇六號又は支一〇七號に準ずれば良い。

## 三、交雜種の性狀と飼育上の注意

原蠶種管理法に依り、新に決定追加せられたる交雜種は、春蠶に適するもの一、夏秋蠶に適するもの六、計七品種である。今夫等の各々に付、其の性狀と飼育上の注意とを述ぶれば、次のやうである。

### 甲、春蠶に適する蠶品種

**（日 八號　支 一〇七號）**

本種は日支歐交雜一化性（反交は二化性）の白繭種であつて、春蠶に適する新しき組合せとして加へられたものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色に淡紫赤色を帶び、斑紋は濃い形である。經過は他の日支交雜種と大差ないが、蟲質が强健で、食桑が活潑であるから、一化一化交雜種では充分好結果を收め難い地方の飼育に適してゐる。

蠶兒の發育は、齊一である。厚飼を避けると共に、良桑の多回給與により、飽食を圖るがよい。

催青竝稚蠶期の溫度を攝氏二五度以上に保つやうに注意せぬと、生產繭が不良となり易い。又稚蠶及壯蠶の冷濕、壯蠶期の高溫、多濕等は之を避けるが良い。

支母體は日母體に比し、卵量又は蟻量が同一であつても、蠶兒の頭數が約一割多いから、蠶座面積及給桑量を增加



せねばならぬ。

繭形は豐大で、淺縊を有し、繭色は白いが、淡笹を混じてゐる。繭重、繭層重及繭層步合多く、繭絲長長く、繭絲量多く、繭絲纖度は三・〇「デニール」に近く、對一時間の繰絲量多く、類節が少い。

催青卵又は蟻蠶を冷藏するときは、生產繭が不良となるから、注意を要する。

蠶種の人工孵化法は、母體の原種に準ずれば良い。

### 乙、夏秋蠶に適する蠶品種

**（日 一〇號　支 一〇六號）**

本種は日支歐交雜一化性（反交は二化性）の白繭種であつて、熊本縣蠶業試驗場が分離白一號（太）×國蠶支一〇六號として、夏秋蠶用に供したものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色に淡紫赤色を帶び、斑紋は形である。食桑活潑で、經過は速いが、一、二化交雜であるから、冷濕、高溫多濕を避け、除沙分箔の勵行に依り、蠶座の清潔と乾燥とを圖り、未熟桑の給與、給桑不足を避けるが良い。又各齡飼食は稍早目を可とし、殊に高溫時に於ては、全部起揃ふを待たずして、第一回の給桑を行ふが安全である。

催青卵或は蟻蠶を冷藏する場合や、催青竝一、二齡飼育溫度攝氏二五度以下の場合は、生產繭が不良となり易いか

ら、注意を要する。

支母體は日母體に比して、卵量又は蟻量が同一であつても、蠶兒の頭數が約一割多いから、蠶座面積及給桑量を增加せねばならぬ。

繭は淺縊俵形で、縮皺稍密に、色は白い。繭重、繭層重、繭層步合、繭絲長、繭絲量は中位にして、繭絲纖度は二・八「デニール」に近い。對一時間の繰絲量は稍多い。

蠶種の人工孵化法は、母體の原種に準ずれはよい。

本種は初秋蠶期の如き高溫多濕の時期に營繭しても、比較的解舒が良いから、初秋蠶用として適當である。

**（日一一二號 支一一〇號）**

本種は日支歐交雜二化性の白繭種であつて、昭和十三年國が國蠶日一一二號×國蠶支一一〇號として、主に晩秋蠶用の組合せとしたものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色で、斑紋は姫であるが、形を混ずることがある。日一一一號×支一〇七號に比し、經過は大差ないが、蟲質は强健で、食桑活潑發育が齊一である。盛食期より就眠に至る期間が比較的短いから、常に擴座、分箔を怠らず、厚飼を避け、良桑の多回給與に依り、飽食を圖ると共に、冷濕、壯蠶期の高溫多濕を避け、除沙の勵行に依つて、蠶座の清潔と乾燥とを圖るが良い。



催青卵又は蟻蠶を冷藏したり、催青竝稚蠶飼育溫度を攝氏二五度以下に下げるときは、生產繭が不良となり易いから、注意を要する。

上蔟時の高溫多濕は、往々繭解舒を悪くするから、之を避けるが良い。

繭形は淺縊俵形で、縮皺粗く、色は白い。

日一一一號×支一〇七號に比し、繭重、繭層重は稍少く、繭層步合稍多く、繭絲量稍少く、繭絲纖度は二・八「デニール」に近いが、稍細目である。

初秋蠶繭は繭解舒竝小類に於て、稍遜色のあることがあるも、晩秋蠶繭は解舒一般に良好で、小類が少く、蟲質强健で、不良桑（日照不足桑の如き）に對する抵抗性が勝れてゐるから、主として晩秋蠶期に飼育するが良い。

蠶種の人工孵化法は母體の原種に準ずれば良い。

**（日一一三號 支一〇七號）**

本種は日支二化二化交雜二化性の白繭種であつて、長野縣蠶業試驗場が改中巢×國蠶支一〇七號として、夏秋蠶用に供したものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色で、斑紋は形である。

日一一一號×支一〇七號に比し、蠶體重稍少く、經過短く、食桑活潑、發育齊一で、蟲質が强健である。四、五齡

の經過が比較的短いから、厚飼を避け、良桑の多回給與に依り、飽食を圖ることが肝要である。又冷濕、壯蠶期の高溫多濕等を避け、除沙分箔の勵行に依り、蠶座の清潔と乾燥とを圖るが安全である。

催青卵又は蟻蠶の冷藏、催青竝に稚蠶飼育溫度攝氏二五度以下の場合等は、生產繭が不良となり易いから、注意を要する。

日母體は支母體に比し、卵量又は蟻量が同一であつても、蠶兒の頭數が約一割多いから、蠶座面積竝給桑量を增加せねばならぬ。

同功繭が稍多いから、過熟蠶の上蔟と、厚上げを避けるが良い。

繭は淺縊俵形で、縮皺普通、色は白いが、淡笹を混ずることがある。日一一一號×支一〇七號に比し、繭重、繭層重、繭層歩合稍少く、繭絲長稍短く、繭絲量稍少く、繭絲纖度相類似し、二・八「デニール」に近く、對一時間の繰絲量稍少いが、日一一三號×支一一一號に比しては、繭質竝絲質が優つてゐる。

本種は一般的夏秋蠶用品種としては、繭質稍劣るも、蟲質强きが故に、作柄に不安のある地方の初秋及晩秋蠶用に適當と認められる。

蠶種の人工孵化法は、母體の原種に準ずれば良い。

（日一一一三號
支一一一一號）



本種は日支二化二化交雜二化性の白繭種であつて、長野縣蠶業試驗場が改中巢×改安として、夏秋蠶用に供したものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色で、斑紋は形である。

日一一一號×支一〇七號に比し、蠶體重稍少く、經過稍短く、食桑活潑、發育齊一で、蟲質が强健である。日一一三號×支一〇七號のやうに、四、五齡の經過が比較的短いから、厚飼を避け、盛食期前後特に給桑不足に陷らしめぬやうに注意し、良桑の多回給與に依り、飽食を圖るが良い。

又冷濕、壯蠶期の高溫多濕等を避け、除沙分箔の勵行に依り、蠶座の清潔と乾燥とを圖るが安全である。

催青卵又は蟻蠶の冷藏を行つたり、催青竝稚蠶飼育溫度を攝氏二五度以下に下げるときは、生產繭が不良となることがあるから、注意を要する。

日母體は支母體に比し、卵量又は蟻量が同一であつても、蠶兒の頭數が約一割五分內外多いから、蠶座面積並給桑量を增加せねばならぬ。

同功繭が稍多いから、過熟蠶の上蔟と、厚上げを避けるが良い。

上蔟中の高溫多濕は繭解舒を不良にすることがあるから、蔟中の保護は、格別の注意が必要である。

繭は淺縊俵形で、縮皺普通、色は白いが、淡笹を混ずることがある。日一一一號×支一〇七號に比し、繭重、繭層重、繭層歩合稍少く、繭絲長稍短く、繭絲量稍少く、繭絲纖度は相類似し、二・八「デニール」に近く、對一時間の繰

絲量が稍少い。

本種は日一一三號×支一〇七號に比し、繭質及絲質は遜色あるも蟲質が稍強い。繭質及絲質は夏秋期よりも晩秋期の方が良い。故に晩秋蠶期、作柄に不安のある地方に於て、飼育するのに適してゐる。

蠶種の人工孵化法は、母體の原種に準ずれば良い。

### 日一一四號 支一〇七號

本種は日支二化二化交雜二化性の白繭種であつて、郡是製絲株式會社が郡是青×國蠶支一〇七號として、夏秋蠶用に供したものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色に紫赤色を帶び、斑紋は形と姫である。蠶體重稍多く、四、五齢の經過比較的長く、食桑は初め稍緩慢であるが、中食期より活潑となる。溫度の變化に對し感じ易く、往々四眠に於て、發育が不齊となることがあるから、努めて未熟桑の給與を避け、冷濕、壯蠶期の高溫多濕、厚飼等の不良條件を與へず、良桑の少量多回給與に依り、飽食を圖ると共に、除沙の勵行に依つて、蠶座の清涼と乾燥とを圖るが安全である。

催青卵又は蟻蠶の冷藏を行ひ、或は催青並稚蠶飼育溫度を攝氏二五度以下に下げるときは、生產繭が不良となることがあるから、注意を要する。

支母體は日母體に比し、卵量又は蟻量が同一であつても、蠶兒の頭數が約五分多いから、蠶座面積並給桑量を增加



せねばならぬ。

繭は淺縊俵形で、稍尖味あるものを混じ、縮皺稍密に、色は白いが錆色を帶びてゐる。繭質一、二化交雜種に類似し、繭重、繭層重、繭層步合多く、繭絲長長く、繭絲量多く、繭絲纖度は二・八「デニール」に近いが、稍太目である。絲質良く、對一時間の繰絲量が多い。

蠶種の人工孵化法は、母體の原種に準ずればよい。

本種は初秋、晩秋共、蟲質、繭質の動きが割合に少いやうであるが、蟲質は強い方ではないから、飼育に當り、飼料、環境に注意を拂ふことが必要である。蟲質及繭質より見て、晩秋蠶用に適してゐる。

本種は日支二化二化交雜種であるが、一、二化交雜種としての取扱が必要である。

### 日一一五號 支一〇八號

本種は日支二化二化交雜二化性の白繭種であつて、片倉製絲紡績株式會社が榮光×滿月として夏秋蠶用に供したものである。

蟻蠶は暗褐色を呈し、蠶兒の體色は青白色に淡紫赤色を帶び、斑紋は形である。各齢經過殊に四、五齢の經過長く、擧動緩慢である。不良氣象及不良飼料等に對する抵抗性が稍弱いから、冷濕、壯蠶期の高溫多濕等を避け、薄飼を行ひ、良桑の少量多回給與に依つて、飽食を圖り、且つ除沙を勵行して、蠶座の清潔と乾燥とに努むるが良い。又各齢

鉤食は稍早目を可とし、殊に高溫時に於ては、全部起揷ふを待たずして、第一回の給桑を行ふが安全である。

催青卵又は蟻蠶の冷藏を行ひ、或は催青竝稚蠶飼育溫度攝氏二五度以下の場合は、生産繭が不良となることがあるから、注意を要する。

支母體は日母體に比し、卵量又は蟻量が同一であつても、蟻蠶の頭數が約一割多いから、蠶座面積竝給桑量を增加せねばならぬ。

繭は淺縊俵形で、縮皺稍密に、色は白いが、笹を混ずることがある。日一一一號×支一〇七號に比して、繭重、繭層重、繭層歩合稍多く、繭絲長稍長く、繭絲量稍多く、繭絲繊度は二・八「デニール」に近いが、稍細い。對一時間の繰絲量は稍多い。

蠶種の人工孵化法は母體の原種に準ずれば良い。

本種は二化二化交雜種の中では繭質は優れてゐるが、蟲質は非常に强いとは云ひ得ないから、飼育に當り飼料、環境に注意を拂ふことが必要である。蟲質及繭質より見て、晩秋蠶用に適してゐる。

## 附

### 一、蠶品種の主なる性狀調査表

（一）原種の主なる性狀

其の一

（昭和十三年蠶絲試驗場調査）

| 品種名 | 飼育時期 | 化性 | 系統 | 春蠶用夏秋蠶用の別 | 蠶兒の調査 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 蟻蠶體色 | 蟻量一瓦の頭數 | 體色 | 斑紋 | 減蠶歩合 | 蟻量一瓦の給桑量（正葉） | 掃立蠶一萬頭上繭收量 | 同功繭歩合 |
| 日一〇號 | 春蠶期 初秋期 | 一化 | 日歐固定種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二三〇〇頭 二四〇〇 | 紫赤色を帶ぶ | 形 | 一五・〇% 四〇・二 | 五九瓩 | 一三・五瓩 七・〇 | 一・五% 一・七 |
| 日一一二號 | 春蠶期 初秋期 | 二化 | 日歐固定種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二四〇〇 二四〇〇 | 青白色 | 姫形を混ずることあり | 九・五 三二・三 | 六三 | 一四・五 一一・一 | 三・三 二・八 |
| 日一一三號 | 春蠶期 初秋期 | 二化 | 日本種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二九〇〇 二八〇〇 | 青白色 | 形 | 一七・五 三〇・一 | 五八 | 一一・六 八・〇 | 五・二 一・八 |
| 日一一四號 | 春蠶期 初秋期 | 二化（一化に近い） | 日本種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二一〇〇 一九〇〇 | 青白色 紫赤色を帶ぶ | 姫形を混ずることあり | 一一・九 二九・六 | 五六 | 一四・七 九・八 | 〇・五 一・〇 |
| 日一一五號 | 春蠶期 初秋期 | 二化 | 日本種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二四〇〇 二三〇〇 | 青白色（淡紫赤色を帶ぶ） | 形 | 一七・六 三三・二 | 六一 | 一三・三 八・八 | 二・一 二・〇 |

## 其の二

| 品種名 | 飼育時期 | 繭の調査 繭色 | 繭形 | 縮皺 | 繭一立の數 | 全繭重 | 繭層重 | 繭層歩合 | 一粒絲 絲長 | 絲量 | 纖度 | 自然狀態に於ける發蛾歩合 | 卵の調査 越年卵色 | 種繭一瓦當の産卵數 | 一蛾の産卵數 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日一〇號 | 春秋期 | 白 | 俵形 | 密 | 一一〇 | 一・八 | 三・三 | 一八・九 | 八一〇 | 三七・一 | 二・七三 | 八八・〇 | 鼠及藤鼠 | 七七 | 一八〇〇 |
| | | | | | 一三〇 | 一・五 | 二六・三 | 一七・四 | 七四〇 | 三〇・四 | 二・二三 | 七五・〇 | | 六四〇 | 一八〇〇 |
| 日一一二號 | 春秋期 | 白 | 俵形 | 粗 | 一〇〇 | 一・八 | 三・二 | 一九・一 | 七七〇 | 二六・三 | 二・七五 | 九一・七 | 濃藤鼠 | 五六〇 | 一八〇〇 |
| | | | | | 九七 | 一・六 | 二九・一 | 一八・一 | 六九〇 | 三二・六 | 二・六一 | 九〇・七 | | 五四〇 | 一八〇〇 |
| 日一一三號 | 春秋期 | 白 | 俵形 | 稍粗 | 九五 | 一・六 | 三・八 | 一四・三 | 六一〇 | 一七・九 | 二・三六 | 八三・七 | 藤鼠 | 六五〇 | 二一〇〇 |
| | | | | | 一三一 | 一・四 | 一七・〇 | 一二・六 | 四八〇 | 三二・二 | 二・一〇 | 八八・二 | | 五五〇 | 二一〇〇 |
| 日一一四號 | 春秋期 | 錆色がかりたる白 | 尖味ある淺縱俵形 | 稍密 | 一〇七 | 一・九 | 三八・七 | 二〇・九 | 八〇〇 | 二八・八 | 二・八九 | 九二・〇 | 濃藤鼠（稀に鼠卵を混ず） | 九〇 | 一四〇〇 |
| | | | | | 一三七 | 一・六 | 三〇・三 | 二八・八 | 七五〇 | 三二・四 | 二・四〇 | 八八・五 | | 五五〇 | 一五〇〇 |
| 日一一五號、 | 春秋期 | 白 | 俵形 | 普通 | 九三 | 一・八 | 三五・八 | 一九・八 | 八〇〇 | 二六・九 | 二・七一 | 七一・〇 | 藤鼠 | 六六 | 一七〇〇 |
| | | | | | 一三三 | 一・六 | 二八・三 | 一七・九 | 七二〇 | 三一・〇 | 二・〇二 | 八七・四 | | 五五〇 | 一七〇〇 |
| 支一一〇號 | 春秋期 | 白 | 楕圓 | 普通 | 一〇一 | 一・三 | 二五・三 | 一八・八 | 九六〇 | 三一・五 | 二・一八 | 六七・七 | 綠色がかりたる藤鼠（生壁色卵を混ず） | 五七 | 二一〇〇 |
| | | | | | | | | | | | | 三・五 | | 四八〇 | 二一〇〇 |
| 支一一一號 | 春秋期 | 二化支那種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二六〇〇 | 二七〇〇 | 青白色（稚蠶油） | 姬 | 一〇・〇 | 一六・九 | 七・一 | 三・九 | 五九 | 一〇・九 | 三・九 |
| | | | | | 二四〇〇 | 二四〇〇 | 青白色 | | 二〇・三 | | 五・二 | | | 一〇・五 | 三・二 |

（昭和十三年蠶絲試驗場調査）



## （二）原種の催青飼育及蛹期經過表

| 品種名 | 飼育時期 | 催青 日數 | 催青 溫度 | 催青 濕度 | 飼育 日數 | 飼育 溫度 | 飼育 濕度 | 自上蔟最盛日至最多發蛾日 日數 | 自上蔟最盛日至最多發蛾日 溫度 | 自上蔟最盛日至最多發蛾日 濕度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日一〇號 | 春秋期 | 一三日 | 二三・〇度 | 七五・二% | 二八・〇八日時 | 二三・一度 | 七九・五% | 一八日 | 二五・〇度 | 七四・三% |
| | | 一九 | 二五・二 | 八〇・八 | 二三・一二 | 二五・〇 | 八八・二 | 一九 | 二五・〇 | 八六・六 |
| 日一一二號 | 春秋期 | 一〇 | 二五・〇 | 七四・七 | 二九・〇八 | 二三・一 | 七九・六 | 一六 | 二五・〇 | 七五・〇 |
| | | 八 | 二五・二 | 八〇・八 | 二四・二二 | 二五・〇 | 八八・〇 | 一六 | 二五・〇 | 八六・二 |
| 日一一三號 | 春秋期 | 一〇 | 二五・〇 | 七四・七 | 二七・二三 | 二三・一 | 七九・五 | 一四 | 二五・〇 | 七四・七 |
| | | 八 | 二五・二 | 八〇・八 | 二四・〇四 | 二五・〇 | 八八・〇 | 一五 | 二五・〇 | 八八・〇 |
| 日一一四號 | 春秋期 | 一二 | 二五・〇 | 七四・七 | 二八・〇二 | 二三・一 | 七九・六 | 二〇 | 二五・〇 | 七五・〇 |
| | | 八 | 二五・二 | 八〇・八 | 二四・二二 | 二五・〇 | 八〇・二 | 一九 | 二五・〇 | 八〇・八 |
| 日一一五號 | 春秋期 | 一〇 | 二五・〇 | 七四・七 | 二九・一二 | 二三・一 | 七九・〇 | 一八 | 二五・〇 | 七四・七 |
| | | 八 | 二五・二 | 八〇・八 | 二四・二二 | 二五・〇 | 八八・〇 | 一九 | 二五・〇 | 八〇・八 |
| 支一一〇號 | 春秋期 | 二 | 二五・〇 | 七五・〇 | 二六・〇二 | 二三・一 | 七九・六 | 一四 | 二五・〇 | 七五・〇 |
| | | 八 | 二五・二 | 八〇・八 | 二二・〇二 | 二五・〇 | 八〇・八 | 一五 | 二五・〇 | 八〇・八 |
| 支一一一號 | 春秋期 | 一〇 | 二五・〇 | 七四・七 | 二六・一九 | 二六・〇 | 七九・五 | 一八 | 二五・〇 | 七四・七 |
| | | 八 | 二五・二 | 八〇・八 | 二二・一一 | 二五・〇 | 八八・二 | 一六 | 二五・〇 | 八〇・八 |

備考
一、本表は定溫蠶室にて試驗せる成績である。
二、春催青溫度は攝氏一〇度、一五度、二〇度に各一日保護し後一化性品種は攝氏二三度、二化性品種は攝氏二五度の定溫にて催青す。
三、催青日數は定溫保護の期間を示す。
四、初秋蠶は浸酸冷藏種の出庫後の催青日數を示す。

（昭和十三年蠶絲試驗場調査）

## （三）交雑種の主なる性狀

其の一

| 品種名 | 飼育時期 | 化性 | 系統 | 春蠶用夏秋蠶用の別 | 蟻蠶體色 | 蟻量一瓦の頭數 | 繭 體色 | 繭 斑紋 | 飼育 日數 | 飼育 溫度 | 飼育 減蠶歩合 | 蟻量一瓦の桑の給量（正味） | 五齡蠶百頭の食下量（乾物） | 對食下量 全繭重割合 | 對食下量 繭層重割合 | 掃立蠶一萬頭上繭收量 | 給桑一瓩當繭收量 | 同功蠶歩合 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日支一〇八七號 | 春期 | 一化（反交は二化） | 日支歐交雜種 | 春蠶用 | 暗褐色 | 二一〇〇頭 | 青白色（淡紫赤色を帶ぶ） | 濃形 | 二六・〇八 | 二四・〇 | 七・〇 | 六一 | 四一〇・四 | 五五・八六 | 一〇・四六 | 一八・九 | 六七 | 四・一 |
| 日支一〇六號 | 晩秋期 | 一化（反交は二化） | 日支歐交雜種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二四〇〇 | 青白色（淡紫赤色を帶ぶ） | 形 | 二五・一五 | 二五・〇 | 一三・八 | 六八 | 四〇一・五 | 五九・八五 | 一〇・六五 | 一四・九 | 五二 | 五・六 |
| 日支一一一二號 | 晩秋期 | 二化 | 日支歐交雜種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二七〇〇 | 青白色（紫赤色を帶ぶ） | 姫（形を混ずることあり） | 二五・〇三 | 二六・〇 | 七・七 | 七三 | 三五五・六 | 六〇・二〇 | 一一・二八 | 一四・三 | 五四 | 六・三 |
| 日支一〇七號 | 晩秋期 | 二化 | 日支交雜種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二八〇〇 | 青白色 | 形 | 二五・〇四 | 二六・〇 | 一〇・〇 | 七一 | 三三一・〇 | 六七・五 | 一〇・三九 | 一三・四 | 五四 | 一一・一 |
| 日一一一三號 | 晩秋期 | 二化 | 日支交雜種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二三〇〇 | 青白色 | 形 | 二四・一〇 | 二六・〇 | 九・七 | 六〇 | 三四三・二 | 六五・九 | 一〇・二四 | 一四・〇 | 五四 | 八・九 |
| 日一一一〇七號 | 晩秋期 | 二化（二化に近い） | 日支交雜種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二四〇〇 | 青白色（紫赤色を帶ぶ） | 形及姫 | 二五・〇一 | 二五・〇 | 八・五 | 五七 | 三六四・四 | 六四・六一 | 一一・六〇 | 一四・一 | 五五 | 四・〇 |
| 日一一一四號 | 晩秋期 | 二化 | 日支交雜種 | 夏秋蠶用 | 暗褐色 | 二四〇〇 | 青白色（淡紫赤色を帶ぶ） | 形 | 二六・〇〇 | 二五・〇 | 一〇・七 | 七一 | 四二・〇 | 六〇・四六 | 一一・〇二 | 一六・二 | 五五 | 三・八 |

其の二

| 品種名 | 飼育時期 | 繭 繭色 | 繭 繭形 | 繭 繭縮皺 | 繭 上繭一立の顆數 | 繭 全繭重 | 繭 繭層重 | 繭 繭層歩合 | 一粒絲 絲長 | 一粒絲 絲量 | 一粒絲 纖度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日支一〇八七號 | 春期 | 白（淡雅色を混ず） | 豐大にして淡縱あり | 普通 | 七三顆 | 二・二瓦 | 四一・八瓩 | 一八・八% | 九七〇回 | 三四・八瓩 | 二・八九デニール |
| 日支一〇六號 | 晩秋期 | 白 | 淺縱俵形 | 稍密 | 八一 八五 | 一・九 一・八 | 三三・七 三三・四 | 一八・四 一八・六 | 八七〇 八一〇 | 二七・二 二六・六 | 二・五一 二・六二 |
| 日支一一一二號 | 晩秋期 | 白 | 淺縱俵形 | 稍粗 | 八一 七九 | 一・七 一・七 | 三三・三 三三・三 | 一九・八 一九・七 | 八五〇 八七〇 | 二五・二 二六・〇 | 二・四〇 二・四〇 |
| 日支一一一三號 | 晩秋期 | 白（淡雅色を混ずることあり） | 淺縱俵形 | 普通 | 九四 九一 | 一・七 一・七 | 二七・四 二六・六 | 一六・一 一六・四 | 六八〇 六七〇 | 二一・八 二一・四 | 二・五四 二・五四 |
| 日支一一一四號 | 晩秋期 | 白 | 淺縱俵形 | 普通 | 九四 八八 | 一・七 一・七 | 二七・〇 二七・〇 | 一五・九 一六・二 | 六五〇 六八〇 | 二一・二 二一・三 | 二・六五 二・五四 |
| 日支一一一五號 | 晩秋期 | 白（雅色を混ずることあり） | 淺縱俵形（尖味あるものを混ず） | 稍密 | 九〇 九三 | 一・九 一・八 | 三五・七 三五・五 | 一九・八 一九・八 | 八三〇 八三〇 | 二七・八 二七・六 | 二・七二 二・六七 |
| 日支一一一六號 | 晩秋期 | 白（雅色を混ずることあり） | 淺縱俵形 | 稍密 | 九一 八五 | 一・九 一・九 | 三六・三 三七・〇 | 一九・一 一九・三 | 九六〇 九八〇 | 二八・六 二九・二 | 二・四一 二・四〇 |

（昭和十三年蠶絲試驗場調査）







（昭和十三年蠶絲試驗場調査）

## 其の三

| 品種名 | 飼育時期 | 繰絲調査 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 繭絲長（米） | 繭絲重（瓦） | 繭絲纖度（デニール） | 落緒回數（回） | 解舒絲長（米） | 生絲歩合（%） | 對一時間繰絲重（瓦） | 絲條斑平均（點） | 小額（點） | 纖度偏差（デニール） | 平均纖度（デニール） | 練減（%） |
| (日八號 支一〇七號) | 春期 | 九七〇 | 三三・一〇 | 三・〇七 | 〇・二八 | 七九九 | 一五・四五 | 一二八・六 | 八八・〇〇 | 九七・四一 | 〇・八七 | 一三・九一 | 一八・九四 |
| (日一〇號 支一〇六號) | 初秋期 | 八七四 | 二七・二八 | 二・八一 | 〇・二四六 | 七〇五 | 一五・二五 | 九二・〇 | 八八・八一 | 八八・九八 | 〇・九一 | 一三・七四 | 一七・七四 |
| | 晩秋期 | 七八六 | 二五・九九 | 二・九九 | 〇・一三六 | 六九九 | 一四・九〇 | 九七・八 | 八八・二五 | 九二・九五 | 〇・八三 | 一三・九七 | 一八・三七 |
| (日一一二號 支一一〇號) | 初秋期 | 八六五 | 二五・六八 | 二・六八 | 〇・五五四 | 五七二 | 一五・三四 | 六八・七 | 八六・七三 | 八七・六三 | 〇・七五 | 一三・八一 | 一九・一九 |
| | 晩秋期 | 八六九 | 二六・三三 | 二・七二 | 〇・三三七 | 七一〇 | 一五・五三 | 八〇・七 | 八九・五八 | 九三・四五 | 〇・七四 | 一三・六四 | 一九・一八 |
| (日一一三號 支一〇七號) | 初秋期 | 六八九 | 二一・八八 | 二・八五 | 〇・一八八 | 五八一 | 一三・〇五 | 八二・三 | 八七・七〇 | 九〇・九七 | 〇・六六 | 一三・八五 | 一六・三〇 |
| | 晩秋期 | 六七二 | 二一・六五 | 二・九〇 | 〇・〇九三 | 六一六 | 一三・四七 | 七七・六 | 八七・五四 | 九三・五六 | 〇・七一 | 一四・一八 | 一六・五九 |
| (日一一三號 支一一一號) | 初秋期 | 六五一 | 二〇・八八 | 二・八八 | 〇・三〇一 | 五〇三 | 一三・三六 | 五九・〇 | 八七・九五 | 八八・五〇 | 〇・七四 | 一四・〇三 | 一六・八一 |
| | 晩秋期 | 六六〇 | 二一・二八 | 二・九〇 | 〇・一〇一 | 六〇二 | 一三・八二 | 六一・七 | 八七・六〇 | 八八・四八 | 〇・六八 | 一三・九七 | 一六・八二 |
| (日一一四號 支一〇七號) | 初秋期 | 八四一 | 二八・六七 | 三・〇七 | 〇・四一四 | 六〇六 | 一五・四三 | 八八・八 | 八八・二八 | 九二・五〇 | 〇・八七 | 一四・〇三 | 一九・三七 |
| | 晩秋期 | 八四六 | 二八・二九 | 三・〇一 | 〇・二六〇 | 六七六 | 一五・八四 | 九五・九 | 八七・七五 | 九六・二三 | 〇・九二 | 一三・九三 | 一九・五六 |
| (日一一五號 支一〇八號) | 初秋期 | 一〇〇七 | 三〇・五九 | 二・七三 | 〇・三七〇 | 七四七 | 一五・五九 | 九六・七 | 九〇・一三 | 九一・八七 | 〇・八五 | 一三・七八 | 一八・〇八 |
| | 晩秋期 | 一〇一〇 | 二九・三四 | 二・六三 | 〇・一五三 | 八七六 | 一五・四八 | 九六・四 | 九〇・〇〇 | 九四・一三 | 〇・七七 | 一三・七九 | 一八・五六 |

（昭和十三年蠶絲試驗場調査）



## 二、飼育竝蠶種製造上の注意事項

### (一) 人工孵化法に就て

#### 1、即時鹽酸孵化法

即時鹽酸孵化法の場合には、産卵後攝氏約二五度（華氏七七度）の室温に二〇時間内外置いた蠶卵を、液温攝氏四六・一度（華氏一一五度）、比重一・〇七五の鹽酸に、三分乃至五分浸漬する。日一〇號、日一一二號、日一一三號、日一一四號及日一一五號は支一一〇號及支一一一號に比し、浸漬の時間を稍長目に加減する。交雜種は母體の原種に準ずれば良い。

蠶卵の浸酸前、産卵臺紙を豫め二%の「フォルマリン」液に二分間位浸すときは、蠶卵の脱落を防ぐことが出來る。

即時鹽酸孵化法を行はんとする場合には、上蔟後發蛾迄の保護温度を攝氏二五度に保つのが適當である。尙交尾時間を長目とし、交尾産卵中の温度は攝氏約二五度に保ち、且産卵中は暗くして置くが良い。

#### 2、冷藏鹽酸孵化法

（イ）　冷藏鹽酸孵化法の場合には、産卵後攝氏約二五度に置いた蠶卵を、四八時間目に攝氏五度（華氏四一度）の室に移し、二〇日乃至六〇日の後、液温攝氏四七・八度（華氏一一八度）、比重一・一の鹽酸に四―五分間浸漬する。品種に依る浸漬時間の關係は、即時鹽酸孵化の場合に準ずれば良い。攝氏五度の室に冷藏する日數が三〇日より短い場合は、一化性又は之に類似の品種は孵化歩合が劣ることがあるから注意を要する。

（ロ）　短期冷藏（二〇日以内）の場合には、即時鹽酸孵化法を行ひ之を冷藏する。即ち浸酸後攝氏二五度の室に約四〇時間置いた後、攝氏五度に二〇日以内冷藏するのであるが、成可く冷藏日數は短い方が安全である。

冷藏鹽酸孵化法を行はんとする場合にも、上蔟後發蛾迄の保護温度は、攝氏二五度に保つのが適當である。

（二）卵の保護に就て

（イ）越冬後不時の高溫（特に攝氏五度以上）が襲來する場合は、春蠶用蠶種は攝氏二・五度（華氏三六・五度）内外、夏秋蠶用蠶種は攝氏一二・五度（華氏二七・五度）に冷藏し置き、夏秋蠶用蠶種は、五月下旬乃至六月上旬に之を取り出し、攝氏一五度乃至一八度（華氏五九度乃至六四度）の場所に、三、四日置き、胚子を最長期に達せしめ、再び之を攝氏二・五度（華氏三六・五度）に冷藏するが良い。

（ロ）春蠶種の催青は、出庫後直に高溫に移すことなく、攝氏一〇度、一五度及二〇度（華氏五〇度、五九度、及六八度）に各一日乃至二日間保護したる後、目的の催青溫度に移すが良い。

（ハ）一化性の催青溫度は、攝氏二二度乃至二三度（華氏七二度乃至七三度）が適當であるが、二化性の血を混じた一化性原種及二化性原種は、往々生種を生ずることがあるから、催青竝一、二齡飼育溫度を攝氏二五度以下に下げぬやう注意せねばならぬ。新に加へられたる日一一二號、支一一〇號、支一一一號等は、比較的生種を生じ易い傾向があるから、右の注意が特に必要である。

（ニ）一、二化及二化二化交雜種に在つては、催青卵又は蟻蠶を冷藏したり、或は催青竝稚蠶飼育溫度攝氏二五度以下の場合は、生產繭が不良となる。已むを得ず、卵又は蟻蠶を冷藏する場合には、卵は點青期を避け、全部催青卵となり僅に發蟻を見たるとき、蟻蠶は孵化後直に、攝氏五度中に二、三日を限りて冷藏し、冷藏中は過乾に陷らぬやう注意が肝要である。



（ホ）春又は夏秋蠶期採種の蠶種は、產卵後成可く攝氏二七度（華氏八〇度）以上の高溫を避け、九月以降は自然溫度の降下に任せて保護するが良いが、晩秋蠶期採種の蠶種は、產卵後攝氏二五度に少くも二〇日乃至三〇日間保護し、中間溫度（攝氏一五度内外）に二、三日間置いた後、自然溫度に移すやうにし、此間過乾に陷らぬやう、濕度は七〇％内外に保つことが必要である。

（三）不脫繭蛾に就て

繭中にて化蛾せる儘繭を脫出し得ない蛾を生じ易い品種に在つては、豫め繭の兩端又は一端を切開して、蛹の頭部を切口の方に向けて置けば、普通に採種が出來る。支一一〇號の如きは、斯の如き注意が必要である。

五齡期軟葉の給與を避け、發蛾の際種繭保護室を成可く明るくして、繭中に光線の照射を可良にするときは、不脫繭蛾を少くすることが出來る。

（四）不受精卵に就て

種繭の保護溫度適當を缺き、又種繭或は雌蛾の冷藏を行ふときは、蠶品種に依り、不受精卵を多く生ずることがある。一般に種繭の保護溫度は、一化性品種は攝氏二三度（華氏七三度）、二化性品種は攝氏二五度を目的とし、夫以下の低溫を避け、且種繭又は雌蛾の冷藏は、成可く之を避けることが必要である。殊に此注意は支一一〇號の如き品種に於て肝要である。

（五）交互雜種に就て

同一品種に在つても、交互雑種に依つて、卵量又は蟻量が同一でも、蠶兒の頭數に甚しき差異のあることがあるから、蠶兒の頭數に從つて、給桑量及蠶座面積を加減することが必要である。

對蟻量一瓦蟻蠶頭數（一例）

| 品種名 | 蟻蠶頭數 |
|---|---|
| 日一〇號×支一〇六號 | 二〇八三 |
| 支一〇六號×日一〇號 | 二二五〇 |
| 日一一三號×支一〇七號 | 二八一一 |
| 支一〇七號×日一一三號 | 二四五五 |
| 日一一三號×支一一一號 | 二七七六 |
| 支一一一號×日一一三號 | 二三一八 |
| 日一一四號×支一〇七號 | 二三〇〇 |
| 支一〇七號×日一一四號 | 二四〇〇 |
| 日一一五號×支一〇八號 | 二四〇〇 |
| 支一〇八號×日一一五號 | 二六〇〇 |

（六）眠起の取扱に就て

夏秋蠶高溫時は蠶兒の經過が速く、盛食期の期間が短いから、中食期を過ぎたならば、給桑回數及給桑量を增加することに努め、催眠期に近づいても、給桑回數を減ぜぬやうにし、飼食は早目を可とし、高溫多濕時に於ては、全部起揃ふを待たずして、第一回の給桑を行ふことが安全である。眠中は淸涼且稍乾燥に保つやうにする。

（七）族中の保護に就て

族中の高溫多濕は、繭の解舒を不良となし、小顆を多からしめるものであるから、熟蠶の厚上げを避け、（尺坪五〇頭以內とし）、蔟拔は早目に行ひ、（春蠶は上蔟後二〇時間內外、夏秋蠶は一七、八時間內外に行ひ、成可くは、其中間に一回蔟拔を行ふが良い）、蠶室の密閉を避け、間仕切、欄間、天井窓等を適宜開いて、通風を促し、乾燥を圖ると共に、日覆を施して、陽熱の侵入、溫度の上昇を防ぐことが肝要である。

低溫にて多濕の場合は、火力補溫に依り、乾燥を圖るが良いが、此の場合でも、攝氏二四・五度（華氏七五度乃至七七度）以上に昇溫することは避けねばならぬ。

日一一二號×支一一〇號、日一一三號×支一一一號等は、族中の高溫多濕に依り、絲質に不良なる影響を蒙り易い傾があるから、特に以上の注意が必要である。

（八）蠶品種の選擇に就て

今回新に加へられ養蠶家の飼育すべき蠶品種に於て、春蠶に適したる品種、日八號×支一〇七號は蟲質が强健であるから、他の一化一化交雜種等では好成績を收め難いやうな地方に適してゐるが、繭絲纖度三・〇「デニール」に近いことも考へた上で、品種の選擇を行ふが良い。又夏秋蠶に適した六品種は、蟲質、繭質及絲質に於て、各々特徵がある。卽ち蟲質に於ては、日一一二號×支一一〇號、日一一三號×支一〇七號、日一一三號×支一一一號は共に日一〇

號×支一〇六號、日一一四號×支一〇七號、日一一五號×支一〇八號に比して強い。卽ち、不良氣象又は不良桑等に對する抵抗力が勝れてゐる。繭質に於ては、日一一三號×支一〇七號、日一一三號×支一一一號等は他の品種に比較して稍遜色がある。又日一一二號×支一一〇號、日一一三號×支一一一號は初秋蠶期、高溫多濕の場合、繭解舒及小顆に於て稍遜色を見ることがある。

繭織度に在つては、何れも二・八「デニール」に近いが、日一一二號×支一一〇號、日一一五號×支一〇八號は稍細目で、日一〇號×支一〇六號、日一一四號×支一〇七號は稍太目、日一一三號×支一〇七號、日一一三號×支一一一號は其中間に在る。

以上の如く、夏秋蠶用交雜種には夫々特徴があるから、飼育地に於ける氣象、飼料、蠶作等を斟酌し、掃立時期に應じて、適當なりと認むる蠶品種を選擇するやうにしなければならぬ。

表紙裏に記載せる夏秋蠶品種の飼育時期は關東平地に於ける例で、地方に依つて、必ずしも一樣に云ひ難いが、蠶品種選擇の參考に示したものである。

昭和十四年五月二十五日印刷
昭和十四年五月三十一日發行

農林省蠶絲試驗場
東京市杉並區高圓寺

印刷者　東京市神田區美土代町十六番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町十六番地　三秀舍

終